

Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology

東京都健康長寿医療センター

研究所 No.309
2023.3
(春号)
NEWS

東京都健康長寿医療センター研究所

Index

新年度を迎えるにあたって	1～3
中期計画 一第三期総括—(自然科学系)	4～6
中期計画 一第三期総括—(社会科学系)	7～9
表彰	10
病院、研究所開設50年・ 養育院創立150年記念事業を実施しました	11
令和5年度の老年学・老年医学公開講座について	11
今後の講演会予定	12
主なマスコミ報道	12
編集後記	12

新年度を迎えるにあたって

東京都健康長寿医療センター理事長 鳥羽 研二

2022年度も残すところあと僅かとなりました。COVID-19の蔓延が続く中、研究所の献身的なPCR検査への貢献に改めて感謝いたします。また、この渦中であって、コホート研究を含む感染対策を行なって活動量を落とさず研究成果を上げてくれた研究所全職員に敬意を表します。

さて、昨年からの主だった研究所基盤の改革について述べたいと思います。

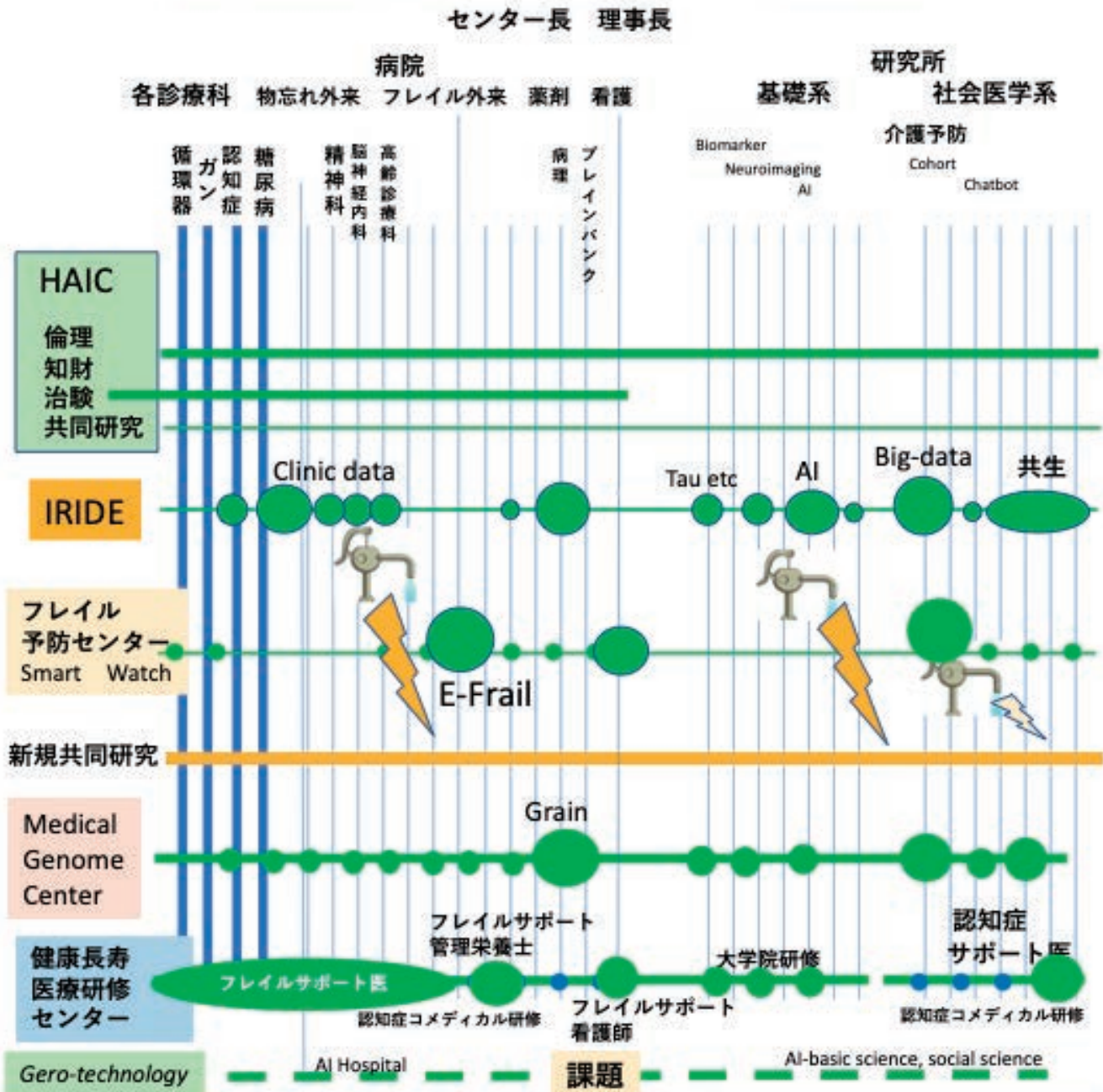
まずは英文表記の変更です、病院と研究所が一体になって10年以上を経過しましたが、英文名称は病院と研究所のコンセンサスは得られていませんでした。今回、海外でも通称が行き届いているTMIGを活かし、Tokyo Metropolitan Institute for Geriatrics and Gerontology (TMIG) とし、Gは二重文字にできればなおいいと思います。

この経緯は、研究所と病院の一体的な研究の向上のため、健康長寿イノベーションセンター(Healthy Aging Innovation Center:HAIC)を設立したが、基盤的サービス(倫理、知財、治験補助、共同研究補助)に留まっており、研究所を上げての支持には至っていませんでした。

3年前、まず東京都からのビッグプロジェクトである認知症未来社会創造センター(Integrated Research Initiative for well-being in persons with Dementia: IRIDE)を立ち上げ、発症前、前段階(MCI)、軽症、中等症以上のいずれの段階においても進展予防のための技術開発の革新



拡充整備後の健康長寿医療センター組織概念



健康長寿イノベーションセンター (HAIC)は、臨床と研究が別々に活動していたものを有機的に結合するために組織された

認知症未来社会創造センターとスマートウォッチ事業はこの協働作業に実態を持たせ、HAICを必須な組織にらしめた

メディカルゲノムセンターは都民にビッグデータの成果を還元する新たな仕組みで、病院、研究所を上げて活動する

健康長寿研修センターは、「人」こそ未来への財産との理念で、医療職、介護職など広く高齢者医療、福祉に資する人材を地域で養成する

を、コホートビッグデータ、バイオマーカー、神経画像、創薬シーズ、AIテクノロジーなどに幅広いイノベーションチームを立ち上げ、共生についてもテクノロジーの導入や教育システムの革新のための健康長寿研修センターを立ち上げ、実質の向上を計りました。社会医学系は、統一コホートを活かし、フラミンガムスタディーのような認知機能低下のアルゴリズムの完成に向け、早期発見と行動変容のツールの社会実装を目指しています。基礎医学系は、木村らがTauなどアルツハイマー病（AD）の進展過程で重要な血液バイオマーカーの微量測定に成功し、コホートでの測定も開始しました。今後の治験など需要増大に朗報です。また神経画像では、東大松尾研究室と亀山らが、微小出血のAI診断の実用性に道筋をつけました。新規AD治療薬では30%に微小出血が見られ、喫緊の需要に応える研究になることを願っています。さらに新規機序解明研究では、2018年に国際学術会議（日本の学術会議の世界連合体）が、神経疾患の基礎的な変性の共通項の解明に立ち返った機序解明、創薬基盤の創設が必要との声明を出し、私が代表で出席して、安倍首相（当時）に提言を手渡しました。アルツハイマー病に関与する、栄養、血管、炎症、代謝、ホルモンなどの全身系統は、どれをとっても脳内環境や神経細胞との交絡を保持しているでしょう。ヒトゲノム解析による疾患と関連する遺伝子などが数多く報告され、APOE4は今ではアルツハイマー病の圧倒的な危険遺伝子ですが、発見前は脂質関連が関係するわけがないと基礎研究者に嘲笑されていました。一方で糖尿病は危険因子ですが、糖代謝との直接的関連解明は未だ十分ではありません。AD関連ゲノムはポリジェノミックスコアを含めほとんど総浚いされました。しかしゲノム情報からは予測が困難なタンパク質翻訳後修飾される糖鎖の研究はこれからであり、グライコームプロジェクトが立ち上がる今年から、当研究所の世界に伍する能力の貢献が待たれます。これらに加え性ホル

モンの影響もメカニズム解明に重要です。プロテオーム解析を含め新しい発見を期待しています。老化研究から派生する、老化細胞、抗酸化剤（ビタミンC）などの新規の修飾作用研究も期待されます。

共生関連では、井藤らの「ゴミ屋敷症候群」の本邦での初の認知機能との実態調査論文を活かし、今後の社会実装、政策提言につなげてほしいと思います。地域のコミュニティの再生と、認知症の理解は一体です。高島平モデルをよる普遍的に広げていく上で、障壁の構造的解析が必要と考えます。

偏見の打破には、まず医療福祉関係者の完全な意識改革が必要です。2000年の日本医師会調査で医師の半数が認知症は病気ではないと回答してから20年経ちました。未だに臓器別専門医の意識は十分ではありません。コメディカルが先んじて高い意識を身につけ、時代遅れのプロフェッショナルを啓蒙していきたいと思います。

超高齢社会において一人世帯の増加が課題としてあがってきていますが、今その「独居の時代」は始まったばかりです。軽度の認知機能低下だけでも、索漠感、孤立感は何ばかりかと想像することから始まります。チャットボットの作成研究はそのような背景から出発し、なんとか会話が繋がるプロトタイプの実装に向けた歩みが急がれます。

以上、IRIDEの活動は病院と研究所の一体的な活動の向上に、HAICの存在が不可欠である状況に変化をもたらしました。後続のスマートウォッチ研究も同様です。

第4期のグランドデザインを示します（図）。この中で今後も、良い意味の競争と一体化を持って、ますますの研究所の発展を祈っております。

中期計画 —第三期総括— (自然科学系)

自然科学系副所長 **重本 和宏**

平成30年から開始された5カ年の第三期中期計画が令和5年3月末に終了します。中期計画の最終年度は研究所の創立50周年と重なります。当研究所は東京都老人総合研究所として1972年に老化研究所としては世界では2番目（1番目：1958年ソビエト連邦医学アカデミー老年学研究所、現ウクライナ医学アカデミー老年学研究所キーウ）、日本では唯一の施設として設立されました。近年では、超高齢社会を世界に先駆けて迎えた我が国だけでなく、欧米においても健康長寿の延伸を目指した認知症およびサルコペニア・フレイルなど、老化に関わる基礎研究の重要性が年々高まっています。そして、基礎研究の成果を基に、早期診断や予防・治療法などの社会還元を目指した研究成果が求められています。

このような背景の中、当センターの第三期中期計画の目標として「高齢者に特有な疾患と老年病症候群を克服するための研究」が掲げられ、自然科学系は老化のメカニズムに関する研究と、その成果を老化予防や高齢者疾患の予防・治療など社会貢献へとつなげる橋渡し研究を中期計画の目標として5年間の研究を推進しました。

認知症の研究は1972年の開設時から継続して進めていますが、第三期中期計画で大き

な転機を迎えました。鳥羽理事長と井藤前理事長のご尽力により東京都のプロジェクトとして2020年から5年計画の認知症未来社会創造センター



プロジェクト(IRIDE)が始まり、認知症患者の臨床データ、ブレインバンクと社会科学系の長期縦断研究の疫学研究データを各生体試料と合わせた統合データベースの構築を進めています。それを活用して自然科学系は認知症の発症メカニズムと早期診断・治療法の研究を推進しています。PET画像診断研究部門は認知症の早期診断技術の開発と臨床治験において我が国の中核的役割を担い、成果の社会実装の役割を果たしています。また、社会科学系とフレイルの研究にもPETを使い協力しています。PET薬剤科学研究部門は新規PET放射性診断薬（脳血液関門機能）の世界初臨床使用を達成、また初期臨床試験とPETデータ解析の開発を行いました。神経病理学部門は1992年に創設したブレインバンクの高品位リソース（アルツハイマー病脳、パーキンソン病脳、軽度認知障害脳、その他の疾患脳と正常脳の凍結脳）のさらなる蓄積を行い、国際共同研究の代表として認知症の新し

い考え方 (limbic age associated TDP43) の提唱と皮質基底核変性症の病理診断基準を確立して、研究所内外の最先端の認知症研究の成果に貢献しました。老化脳神経科学部門と運動器医学部門は認知症の早期診断のバイオマーカーの開発を進めています。また、老化脳神経科学部門は社会科学系と連携して疫学研究の結果について、動物モデルを使い科学的根拠を明らかにする研究を進めています。

今から20年前にはまだ概念として存在しなかったサルコペニア・フレイルが、現在では認知症と同列で老化研究において克服すべき重要な研究課題となりました。サルコペニアは2016年に国際疾病分類に登録され、2014年には日本老年医学からフレイルの概念が提唱されました。2020年から質問表を使ったフレイル検診が制度化されました。しかし、フレイルは疾患の概念としてまだ曖昧であり、現時点の基礎研究では健康長寿を目標とした幅広い分野がフレイルの研究と言えます。今施行されているサルコペニア・フレイルの診断基準および介入方法は、ヒトを対象とした疫学的研究から科学的根拠を得ています。一方で、臨床現場で使われている様々な疾患の診断基準と治療法は、基礎研究を基にした科学的根拠を拠り所にしており、老化の基礎研究の重要性が高まっています。

サルコペニア・フレイルの病態を解明して有効な予防法を開発するためには、関連する臓器や病態などの様々な専門領域に留まら

ず、領域横断かつダイナミックなアプローチによる基礎研究が必要です。研究所の動物施設では、創設時より老化動物（マウス、ラット）を飼育・維持して、研究所の老化の基礎研究に加えて、早期診断と予防・治療法の研究リソースとして貢献しています。近年、神経筋疾患（希少疾患）のメカニズムと治療法研究から、サルコペニアへ適応拡大を目指す研究が欧米で進められています。当研究所では、老化神経生物学部門と運動器医学研究部門が疾患マウスモデルを使い神経筋難病とサルコペニアのメカニズム解明、バイオマーカーの開発と創薬研究に取り組んでいます。運動器医学研究部門は筋萎縮の早期診断のバイオマーカーを発表して、サルコペニアと神経筋難病の創薬研究を進めています。分子機構研究部門は、長年の糖鎖研究から福山型筋ジストロフィーの新しい治療法を発見しました。また糖鎖の解析手法を生かして、糖鎖がアルツハイマー病、ガンの悪性化そして慢性閉塞性肺疾患(COPD)の原因に関与することを明らかにしました。

老化細胞を薬物で除去して健康長寿に役立っている研究が注目されています。分子老化制御研究部門は老化マウスの肝臓の遺伝子発現をシングルセルで解析を行い、老化関連遺伝子を発見して機能解析を進めています。

ミトコンドリアは細胞内の小器官で、エネルギー産生や代謝の調節と臓器の機能維持に重要な役割を果たしています。老化のメカニズムとは密接な因果関係があるのですが、未

解明の課題が多く残されています。生体調節機能研究部門、システム加齢医学研究部門、プロテオーム研究、運動器医学研究部門はそれぞれ異なる視点とアプローチにより、ミトコンドリアの基礎研究から健康長寿とサルコペニア・フレイルのメカニズムの解明へとつながる研究成果を発表しました。

自律神経機能研究部門は、嗅覚と認知機能および脳内血流の関連性を明らかにして、バラの匂いの感度が低下した高齢者の認知機能の一部が低下していることを見出し、認知症診断に活用できることを報告しました。また、高齢者の排尿機能の改善につながるメカニズムを解明して、夜間頻尿を改善する治療法を開発して製品化しました。さらに、食事の際の嚥下運動が甲状腺を刺激して、骨粗鬆症を予防することを動物モデルで示しました。

食事（栄養）による認知症とサルコペニア・フレイルの予防効果の研究は重要です。システム加齢医学部門は社会科学系と連携してビタミンK不足が認知機能低下とフレイルが関連することを明らかにしました。また、老化制御研究部門は高齢者の慢性腎臓病患者の血中ビタミンC濃度が低く、血液透析もビタミンC低下の原因となることや、ビタミンC不足が筋萎縮の原因となり、薬剤性腎障害の耐性を低下することを明らかにしました。

高齢者の難治性がんの研究も第三期中期計画で掲げた重要な課題です。システム加齢医学部門は乳がんと前立腺がんの治療抵抗性（ホルモン非依存性）のメカニズムを解明し

て治療薬の発見に結びつけました。高齢者がん部門は膵臓がんを老化細胞へ誘導してから除去する新しい治療法を心血管再生部門と協力して発見、また多様性に富む膵がん細胞の3次元培養による治療薬の探索技術を開発しました。

最後にCOVID-19のパンデミックは当センターの運営に大きな影響を与えましたが、自然科学系が病院部門に協力してウイルス感染のPCR臨床検査をサポートしています。自然科学系、社会科学系と病院部門が一体となって連携して、研究センターの運営に貢献することができました。



中期計画 一第三期総括一 (社会科学系)

社会科学系副所長 栗田 圭一

はじめに

社会科学系では、高齢社会の諸課題を明らかにし、その要因の解明に向けた基礎的研究と、課題解決や社会実装に向けた応用研究を行うことによって、健康長寿社会の実現と高齢者が希望と尊厳をもって生きることができ、未来社会を創造することを大目標に掲げて研究を行ってまいりました。この目標を達成するために、3つの研究チームがそれぞれの3つの研究テーマを掲げるとともに、各チームが協働して学際的な長期縦断研究を進めています。以下にその概要を解説します。

社会参加と地域保健研究チーム

主に自立した元気高齢者の「健康寿命の延伸」と「健康格差の縮小」を目標に、社会参加と社会貢献研究、ヘルシーエイジングと地域保健研究、大都市高齢者基盤研究という3つのテーマを掲げて研究を行いました。

社会参加と社会貢献研究では、「プロダクティブエイジングの促進」と「社会参加が健康に及ぼす影響と機序の解明」を2本柱に研究を進めています。前者については、就労働機や目的が高齢者の健康や孤立に影響すること、多世代住民交流がソーシャルキャピタル（地域社会の信頼）の醸成を促進すること、絵本の読み聞かせプログラムや囲碁プログラムなどが高齢者の社会参加と健康増進に寄与

することなどを明らかにしました。また、後者については、居住形態よりも他者とのつながりの有無が健康維持において重要であること、顔に見えるSNSが精神的健康の維持に重要であることなどを明らかにしました。



ヘルシーエイジングと地域保健研究では、長期縦断研究によって健康長寿の要因に関する広範な知見が産出されました。例えば、高齢者の自立喪失（要介護認定や死亡）には生活習慣病と機能低下の両者が関連すること、腎機能低下の加齢変化パターンが死亡リスクと関連すること、要介護化リスクは身体組成（骨格筋指数や脂肪指数）に関わらず握力と歩行速度に関連すること、しかし、男性の総死亡リスクは握力や歩行速度よりも身体組成に依存することなどを明らかにしました。また、このような疫学研究データに基づいて、身体的フレイル（加齢に伴って生じる身体機能の低下）の発生を予測するモデルをつくり、地域づくりによってフレイルの予防を進めるシステムを開発し、自治体での社会実装を進めました。

大都市高齢者基盤研究では、①高齢期の

ワークライフバランス推進のための課題の明確化、②世代間支援の実態と効果の解明、③単身者の社会的孤立に関する研究が行われ、高齢者が支援者として参加する世代間交流プログラムは子供の自己効力感や共感性の向上に寄与すること、経済状態の悪い男性単身者が援助要請をしない要因の一つに「将来への諦め」があることなどを明らかにしました。

自立促進と精神保健研究チーム

老年症候群や老年病の予防、認知症になってからも希望と尊厳をもって暮らせる地域社会の創出を目標に、フレイルと筋骨格系の健康研究、口腔保健と栄養研究、認知症と精神保健研究という3つのテーマを掲げて研究を行いました。

フレイルと筋骨格系の健康研究では、「お達者健診」と呼ばれる板橋区をフィールドとする長期縦断研究において、運動と食事摂取の多様性がフレイルの発生を抑制すること、ベータヒドロキシ・ベータメチル酪酸（必須アミノ酸であるロイシンの代謝産物）が筋肉の質を高めること、ビタミンKの不足がフレイルや認知機能低下や抑うつに関連すること、下肢の身体機能低下が尿失禁の発生に関連することなどを示し、運動とアミノ酸補充が腰痛の改善に寄与すること、白カビチーズの摂取が脳由来神経栄養物質(BDNF)を高めること、ラジオ体操がフレイル予防に有効であることなどを明らかにしました。

口腔保健と栄養研究では、オーラルフレイル（加齢に伴って生じる口腔機能の低下）が

高齢者の低栄養、身体的フレイル、サルコペニア、要介護状態、死亡の発生に関連することを明らかにするとともに、口腔機能低下を測定する医療機器の開発や、要介護高齢者の口腔・栄養管理のガイドライン作成を進めました。また、認知症高齢者の口腔・栄養管理の課題を明らかにするとともに、口腔の衛生状態の改善が認知機能の向上に寄与すること、歯科衛生士による介入が口腔ケアに対する認知症高齢者の過敏症状の軽減に有効であることなどを示し、認知症患者の歯科的対応及び歯科治療に関するガイドラインを作成しました。

認知症と精神保健研究では、地域には複合的支援ニーズを持ちながら支援にアクセスできず孤立している認知機能低下高齢者が数多く潜在していること、生活支援のネットワークをつくる地域の拠点が独居認知症高齢者等の地域生活の継続に寄与することなどを明らかにし、独居認知症高齢者等が安全・安心に暮らせる環境づくりのための手引きを作成しました。また、わが国の若年認知症の有病率・発生率・生活実態の全国調査を行い、今後の若年性認知症施策の立案に向けた政策提言を行いました。さらに、農福連携や寺院など多様なステークホルダーと協働した認知症フレンドリー社会の実現に向けた研究にも取り組みました。

福祉と生活ケア研究チーム

要支援・要介護状態にある高齢者や後期高齢者における生活機能・生活環境の向上を目

標に、介護予防研究、医療・介護システム研究、介護・エンドオブライフ研究という3つのテーマを掲げて研究を行いました。

介護予防研究では、スマートフォンのGPS機能を活用した日常生活歩行速度を測定するアプリを開発して信頼性を検証するとともに、地域在住高齢者における標準データを作成しました。また、ICT技術を活用した簡易生活機能評価機器の開発やAIによる介護予防評価システムの開発を進めました。介護予防の普及・推進に関しては、介護予防運動指導員の養成や「通いの場」の課題の明確化と課題解決に向けた研究に取り組みました。

医療・介護システム研究では、健診や医療・介護レセプトデータ等のビッグデータを用いた研究を行い、自治体のKDB（後期高齢者データベース）システムを用いた研究から後期高齢者の多疾患併存の実態を明らかにするとともに、多疾患であることが要介護認定・死亡リスクを高めることを明らかにしました。ま

た、入院患者データから、認知症重症度が高いと在院日数が長期化すること、重症度が高まるに従って退院後の再入院率が高まることなどを明らかにしました。

介護・エンドオブライフ研究では、高齢者困難事例が抱える困難事象には、①精神的健康の課題、②身体的健康の課題、③家族介護者の課題、④近所づきあいの課題、⑤金銭トラブルという5つの類型があること、認知症高齢者の行方不明は独居であることが発見時死亡のリスクを高めること、ディオゲネス症候群（いわゆるゴミ屋敷症候群）は社会的孤立状態にある独居高齢者の認知症が中等度以上に進行していることと関連していることを明らかにしました。

おわりに

老年学の研究を行うためには多様な分野との協働が必要です。第4期には、認知症やフレイルにフォーカスをあてた学際的研究をさらに推進させることを計画しています。





表彰

第81回日本公衆衛生学会総会 口演賞

抑うつ症状とパンデミックによるセルフケア行動変化の関連
：2年間の縦断調査

自立促進と精神保健研究チーム 研究員 枝広 あや子

日本生化学会 2022年度JB論文賞

PCYT2 synthesizes CDP-glycerol in mammals and reduced PCYT2 enhances the
expression of functionally glycosylated α -dystroglycan

老化機構研究チーム (分子機構研究)

研究員 今江 理恵子 研究副部長 萬谷 博 シニアフェロー 遠藤 玉夫

老化機構研究チーム (プロテオーム研究)

研究員 津元 裕樹 研究副部長 三浦 ゆり

第9回日本予防理学療法学会学術大会 大会長賞

コロナ禍における地域高齢者の社会的ネットワークの変化パターン：お達者研究

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 河合 恒

第9回日本予防理学療法学会学術大会 優秀賞

地域在住高齢者における社会的孤立状態の有無と生活機能の軌跡の関連：お達者研究

高齢者健康増進事業支援室 技術員 今村 慶吾

第23回日本認知症ケア学会大会 石崎賞

小規模多機能事業所における認知症高齢者のエンドオブライフケア

福祉と生活ケア研究チーム 研究部長 井藤 佳恵

認知症の人を包摂する稲作ケアプログラムの新展開①

自立促進と精神保健研究チーム 研究副部長 岡村 毅

認知症への気づき・相談が遅れたケースの質的分析：受診前支援の検討

認知症未来社会創造センター 研究員 山下 真里

病院、研究所開設 50 年・養育院創立 150 年記念事業を実施しました

東京都健康長寿医療センターは、昭和47年に東京都養育院附属病院（老人医療センターを経て、現在の健康長寿医療センター病院部門）と東京都老人総合研究所（現在の健康長寿医療センター研究部門）が開設されて50年目であるとともに、養育院の創設明治5年から150年目を迎えることができました。

その節目の記念事業として、センターの軌跡を辿り、関わった方々へのこれまでのご尽力に感謝の意を表するとともに、今後の事業の改善・発展を祈念し、東京都及び板橋区との共催により令和5年2月9日に板橋区立文化会館にて記念講演を行いました。

当日は、対面開催と同時にオンライン配信を行っ

た結果、板橋文化会館には523名の方が来場され、ライブ配信では543名の視聴があり、併せて1,000名を超える方に聴講していただき、また、東京都知事小池百合子様をはじめ、多くの来賓の方にご出席いただき、また、ご祝辞を賜りました。皆様のお力添えをいただき、本行事を無事に終えることができましたこと、この場をお借りして感謝を申し上げます。

私たちは、これまで150年に亘りわが国の高齢者の福祉、医療に重要な役割を果たした養育院の歴史を踏まえつつ、これからも健康長寿社会の実現を目指し最善を尽くして参ります。

当日の講演につきましては、下記の二次元バーコードからご視聴いただけます。



東京都知事小池百合子様のご挨拶



会場の様子



ロビー周辺

令和5年度の老年学・老年医学公開講座について

年4回開催しております、「老年学・老年医学公開講座」について、令和5年度はオンライン配信を上半期に2回、対面開催を下半期に2回実施する予定です。今後の情報につきましては、今後の研究所NEWSまたは当センターのHPにてご確認ください。

老年学・老年医学公開講座の情報につきましては、右記の二次元バーコードからご確認ください。



講演会開催予定

※当日参加票回収

令和5年度科学技術週間参加行事

「最新イメージング技術で脳血管のはたらきを見る」

開催日：令和5年4月18日(火)
12時30分から16時まで(開場12時30分)

会場：板橋区立文化会館 2階小ホール

令和5年度科学技術週間参加行事に関する詳細は、右記の二次元バーコードからご覧いただけます▶▶▶



申込不要、当日先着250名

東京都健康長寿医療センター研究所 令和5年度科学技術週間参加行事

最新イメージング技術で 脳血管のはたらきを見る

日時 令和5年4月18日(火)
12時30分から16時まで

会場 板橋区立文化会館
所在地：東京都板橋区大山東町51-1

講演 会場：2階小ホール(当日先着250名)
時間：13時30分から14時50分まで(12時30分開場)

渡辺 信博 老化脳神経科学研究チーム 自律神経機能研究室 研究員

ポスター発表 会場：4階大会議室(時間内に自由にご覧いただけます)
時間：12時30分から16時まで(12時30分開場)

研究内容(自然科学系・社会科学系)をポスター形式でご紹介いたします。

脳はエネルギー消費の多い臓器で、正常に働くためには絶えず血液供給を必要とします。脳の血流は、血液の通り道である脳血管の幅をコントロールすることで調節されます。本講演では、最新のイメージング技術により見えてきた脳血管のはたらきについてご紹介したいと思います。

主なマスコミ報道

2022.11 ~ 2023.1

副所長

栗田 圭一

- レカネマブ アルツハイマーに挑む
(日本経済新聞社「日本経済新聞」2023.1.18)

社会参加と地域保健研究チーム

研究部長 藤原 佳典

- 就労はシニア生きがい三方良しで多面的効果期待
(日刊スポーツ新聞社「ニッカンシニア」2022.11.1)

福祉と生活ケア研究チーム

研究部長 井藤 佳恵

- 「ごみ屋敷」の深層
(毎日新聞社「毎日新聞」2022.11.7)

社会参加と地域保健研究チーム

専門副部長 鈴木 宏幸

- 音読が脳の多くを活性化させる
(小学館「女性セブン」2022.12.8)

福祉と生活ケア研究チーム

研究員 菊地 和則

- 早期発見へ事前対策
(読売新聞社「読売新聞」2022.11.18)
- 認知症不明者早期発見が鍵
(山梨日日新聞社「山梨日日新聞」2022.12.30)

福祉と生活ケア研究チーム

研究員 光武 誠吾

- 情報に踊らされないための情報リテラシー
(日刊スポーツ新聞社「ニッカンシニア」2022.12.6)

編集 後記

5月8日から新型コロナウイルス感染症上の分類が第5類になるということです。コロナ禍になって体力が落ちたという方や、人との関わりが減ってしまったという方も多いと思います。暖かくなり歩き易くなりましたので、春はポストコロナの活動再開に向けて心身ともに準備していく期間とするのも良いかもしれません。

(ふえるまーた)



2023年3月発行

編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町 35-2 Tel. 03-3964-3241 FAX.03-3579-4776

印刷：コロニー印刷

Twitter アドレス：<https://twitter.com/tmghig>

ホームページアドレス：<https://www.tmghig.jp/research/>

無断複写・転載を禁ずる